
魔導新世紀リリカルなのはA's

マテマテフェイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導新世紀リリカルなのはA's

【Nコード】

N6104Q

【作者名】

マテマテフェイ

【あらすじ】

ジュエルシード事件が集結してから、数カ月スウェンは、かつての仲間なのはやフェイトと敵対しながら、闇の書の呪いを受けしはやてを守る

第1話呪いを受けし子（前書き）

この小説は、魔導新世紀リリカルなのはの続きです
話にはややオ리지ナル要素を入れながら、進めて行きます
（ちなみに…主人公は闇の書勢です）

第1話呪いを受けし子

あれから約3カ月、スウエンは一人の少女と共に暮らしていた

「あれ、お醤油が切れてもうた。スウエン君、今日はおうどん दें
えか？」

「僕は別に平気だよ、何なら買つてこようか、はやて？」

スウエンが聞くと、はやては「もう遅いからええよ」と言いご飯を
作って行く

「はやてと暮らし始めて既に3カ月。別に異常は無い様だけど、何
だろこの禍々しい魔力は……」

スウエンがなのはに別れを告げた理由、それは他でもないはやての
為だった

「出来たで、スウエン君」

「今日はきつねうどんか……」

「あれ、もしかして嫌いやったか？」

「そんな事無いよ。いただきま……す」

お箸を持つて、うどんを食べて行きながらはやては様子を窺う

「どうや、おいしいか？」

「うん、おいしいよ。はやて」

笑顔で言うと、はやては顔を赤くして、うどんを食べて行く。そし
て食べ終えた後、いつものようにスウエンは、洗い物をしてその間
にはやてはお風呂に入っていた

「よし、洗い物終了。はやては平気かな？」

流石にお風呂には、入らずドアをノックして確認する

「はやて、平気？」

「ええ湯加減や……」

はやての無事を確認し、スウエンは2階に上がりはやての布団を整
頓し、自分の部屋の荷物を整理して下に降りる

「はやて、なにしてるの？」

「あつ、スウエン君。私なら平気やで？」

「はやてもう寝る準備も出来てるよ、じゃあ僕もお風呂入るね」

スウエンは、バスルームへと向かい洋服を脱いでシャワーを浴びた後、お風呂に浸かる

「気持ちいいな〜」

お風呂で温まり、スウエンは一度シャワーで体を洗い、もう一度お風呂に浸かり出てくる

「あれ、はやてまだ起きてるの？」

スウエンは、既に新しい服に着替えはやてを心配そうに見る

「なあ、スウエン君今日だけ一緒に寝てくれへん？」

はやてが何かに怯えている事が分かり今日だけは一緒のベッドで寝ることに決めた

「なあ、スウエン君」

「何？」

「どうして、私の所に来たんや？」

「えっと…」

本当の事が言えず、スウエンが口ごもっていると、はやては落ち着いていたのか寝てしまう

「僕ももう寝よう、お休み」

電気を消して、二人は眠りについた

第1話呪いを受けし子（後書き）

新たな生活そして新たな戦いの幕が上がる

次回第2話守護騎士

突然、苦しみだすはやてそして現れる謎の4人本当の戦いが今始まる！！

第2話守護騎士（前書き）

覚醒して行く闇の書そして…

第2話守護騎士

夜がまだ明けない頃、スウェンは異変を感じて目を覚ます

（この違和感：一体なんだ？）

胸に手を当てると、横で何かに苦しむはやてが見えた

「はやて、しっかりして!!」

何度揺らしても返事は無く、スウェンは一冊の本を見る。明らかにそれは普通の本ではなく、魔導書と言う事がスウェンにも分かった（でも何故、魔導書が？）

正体を確かめる為に、近づくとう頭の中に何かが入ってくる。それはこの魔導書が歩んできた出来事だった

「何だ、この記憶：これがこの魔導書の正体？」

頭を押さえながら、スウェンが魔導書に触れると、記憶で見た4人の守護騎士と呼ばれる者が現れた

「あれは、闇の書の守護騎士…」

だんだんと意識が薄れスウェンは倒れる。そして目を覚ますと、元気になったはやてが心配そうに見ていた

「スウェン君、雑炊作ったのやけど、食べられるか？」

「うん、ありがとう、はやて」

雑炊の入った土鍋を貰い、スウェンが食べて行くと、一人の女の子が来る

「ヴィータ、何しに来たんや？」

「シャマルが様子見てこいって言ったからさ、様子を見に来たんだよ」

「そうか、ありがとうな。スウェン君紹介するでヴィータや」

「私はヴィータだ、よろしくな。えつと~~~~~」

名前が分らずヴィータが困っていると、スウェンも自己紹介をする

「僕はスウェンだよ。よろしくね、ヴィータ」

「ああ、よろしくな!!」

握手をして、スウエンが立ち上がると今度は大きな狼が来る

「お前が、主の友か？」

「えっと君は？」

「ザフィーラだ、よろしくなスウエン」

「こつちこそよろしく、ザフィーラ」

挨拶を終え、リビングに向かうと、二人の女性が料理を作っていた

「おはよう、はやてちゃん」

「二人ともご飯作ってくれたんか、ありがとうな~~~~」

「いえ、礼には及びませんよ主。私達にはそれぐらいしかできませんから」

「じゃあ、早速食べようぜ!」

いち早くヴィータは席に着く。スウエンはしばらく女性を見て自己紹介をする

「お前が主の言っていたスウエンか…私は烈火の将シグナムよろしくな…」

「はい、シグナムさんでいいんですよね？」

「ああ、問題無い。そしてこつちはシャマルだ」

「よろしくね、スウエン君」

みんなに挨拶を終えたところで、全員がご飯を食べる。そしてみんなが倒れたのは言うまでも無かった

第2話守護騎士（後書き）

目覚めた闇の書の騎士としてはやてを救う為、行動を開始する

次回第3話リンカーコア

集まって行くリンカーコアそして…

第3話 リンカーコア（前書き）

闇の書、それははやてを徐々に蝕んでいく

第3話リンカーコア

あれから1日後、スウエンははやてや守護騎士と共に、病院に来ていた

「なあ、スウエン」

「うん、どうしたのヴィータ？」

「腹減った!!」

ヴィータのいきなりの言葉にスウエンは戸惑いを隠せなかったが、シグナムに訳を話し、近くにあるお店に入る

「なに、食べる？」

「じゃあ、オムライス!!」

しばらくしてオムライスが来て、ヴィータが食べ始めると、スウエンは懐かしい気配を感じる

（なのはの気配…そう言えばなのは元気かな）

ろくなお別れをせずに来てしまった為、スウエンはなのはの事を心配していた。そしてヴィータがオムライスを食べ終え、お店を出ると丁度お医者さんが終わったはやてが出てきた

「ごめんな、スウエン君ヴィータのせいで…」

「平気だよ、それよりはやてこそ平気？」

聞くと、はやては頷き、スーパーに寄って夕飯の材料を買っていく
「これだけあれば、平気か？」

「うん、十分だと思うよ、シャマルさんが作らなければ…」

「あゝゝ差別ですか、スウエン君」

「いや、普通に差別ではない。それにあんなものよりも主の作ったメニューの方がおいしい筈だ」

全員一致で頷き、少しシャマルは落ち込む。そして家へと帰り夕飯の支度を開始する

「ヴィータそっちの大根取ってくれるか？」

「これだよな、はやて」

「そうや、ありがとうな。それでスウエン君は？」

「スウエンならザフィーラと散歩に行った」

その頃、散歩に行っていたスウエンはなのはと再会していた

「スウエン…君？」

「久しぶりだね、なのは」

「本当にスウエン君なんだよね…」

「うん、元気そうで良かったよ」

今すぐ抱きつきたい気持ちを抑えなのはとスウエンが話しているのを、ザフィーラは静かに聞いていた

「じゃあ、まだ会えないんだね…」

「うん、ごめん僕もう行くよ」

立ち上がりなのはに「ありがとう」と言ってザフィーラと共に戻って行く

「本当にいいのか、スウエン？」

「ザフィーラ、お願いがある。なのはの事は黙っててくれないかな？」

「別に構わない、それより何故お前は我らに協力する？」

「君達が間違わないようにだよ…多分、そろそろ動くんでしょ」

ザフィーラは驚きながら頷き、スウエンとザフィーラが帰ると既にご飯が用意されていた

「遅いで、スウエン君…！」

「ごめんね、ちよつと星空を眺めていたから…」

「それより早く食べようぜ…」

「そうだね、じゃあ戴きます」

全員席に着きご飯を食べる。そしてそれからスウエンはシグナムに呼ばれ外に来る

「スウエン、私達はこれから少し出かけてくる。主の事、頼んだぞ」

「うん、気を付けてねシグナムさん」

「大丈夫だ、じゃあ任せたぞ」

守護騎士たちはどこかへと旅立ち、スウエンははやてが心配しない

ように事情を説明する

「そう言う事が…じゃあスウェン君、後任せて平気か？」

頷き、はやてをベッドで寝させた後、スウェンは遠くで魔導師が倒れる感覚を感じた

第3話リンカーコア（後書き）

遂に始まった、新たな戦いそして巻き込まれるなのは達

次回第4話戸惑い

覚悟を決めたスウエンだが傷つくなのはに戸惑いを覚える

第4話戸惑い（前書き）

はやてを助ける為、ヴィータはなのはと激突するそして…
ここから物語が急展開します（オリジナルストーリーです）

第4話戸惑い

あれから1日後、スウエンはいつも通りに朝食を食べて、洗濯物を干していた

「いつも悪いな〜スウエン君」

「平気だよ、それよりもヴィータ達はまだ寝てるの?」

「まあ帰ってくるのが遅かったしな」

「じゃあ洗濯物も干し終わったし、行こうか」

洗濯物を干し終え、スウエンははやての乗る車椅子を押し図書館へと向かう

「じゃあ、僕も本を探すね…」

「うん、また後でな〜」

手を振ってスウエンとは違う場所にはやては向かい本を探す。その頃、スウエンはヴィータに念話を送っていた

「今から、4時間は平気だよ…」

「スウエン、お前は合流しねえのかよ」

「僕は、はやてを守らなくちゃならないから…」

「そうか、じゃあよろしくな」

念話が切れ、ヴィータ達は行動を開始する。そしてスウエンは何故か、不安を感じていた

「おっと、急いで戻らないと僕も読みたい本があるんだった」

再び図書館に入ると、一人の女の子がはやてと話していた。そしてその子は直接的には知らないが、なのはに教えられた友達に似ていた

「あっ、スウエン君」

「ごめんね、はやて」

「君がスウエン君か、初めまして私は月村すずかよろしくね」

「こっちこそ、それではやてのお友達?」

聞くと、はやてはすずかと会うまでの事を話しスウエンは納得する
「ありがとうね、月村さん」

「別にすずかでいいよ、友達なんだし…」

少し照れてすずかが言うと、いつの間にか閉館時間になりスウェンとはやてはすずかにお別れをして家へと戻って行く

「じゃあね、二人とも」

「うん、すずかちゃん今日はありがとうな〜」

「じゃあ、行こうか」

スウェンがはやての車椅子を押していると、胸に何かが刺さる痛みが来て空を見る

（なのは…でも今の僕は…）

助けに行きたいが、今はやての前から消えるのは得策ではなかった
「どうかしたんか、スウェン君？」

「何でもないよ、はやて」

「でも涙が流れているで…」

（えっ…？）

頬を触ると確かに、涙が流れていた

「私には分からんけど、助けに行くなら行った方がええと思うよ？」

「でも…」

「大丈夫や、私なら心配あらへん。せやから君は行ってええで」

「ありがとう、はやて」

迷いを振り切り、スウェンはなのはの魔力をたどり走って行く

「主、ここにいたのですか？」

「シグナム、シャルもおおきにな」

「スウェンはどこに？」

「彼なら、多分守りに行ったんや」

二人は理解できないままはやてを家まで連れて行くその頃ヴィータとなのはは激突していた

「ハアハア…なんて強さ」

「他愛もねえな…一気に決めさせてもらうぜ!!」

ヴィータが自分のデバイスである『グラーファイゼン』を振り下ろすと、何者かにガードされる

「なっ、お前何してんだ…」

ヴィータが驚いていると、ヴィータの攻撃を止めた魔導師は、ヴィータのハンマーを弾く

「チッ、やるのかよ…」

しっかりと握り距離を開く。そしてなのはは自分を助けてくれた魔導師を見て涙を流す

「スウエン君…」

「ごめん、なのは僕のせいで…」

「別に平気だよ、それよりもなんで私を？」

「どうしてかな、僕にも分からないよでも君を死なせたくなかった」スウエンが言うと、ヴィータはスウエンに突っ込んでくる

「お前、そいつの仲間なのかよ、私達を裏切ったのかよ!!」

「違うよ、ヴィータ」

スウエンは必死で説得しようとするが、ヴィータはスウエンの言葉に耳を傾けず攻撃を仕掛ける

「成程、こう言う事だったのか…」

「なっ放せ、シグナム!!」

「ヴィータそこまでだ、それにスウエンお前は どうする？」

「どう言う事ですか、シグナムさん？」

スウエンが聞くと、シグナムは剣を出しスウエンに向ける

「お前はそっち側の人間なのか？」

「……………」

「どっちだ、スウエン・テストロッサ!!」

「えっ、どうして僕の名を…!？」

スウエンが驚いていると、何かに捕縛される。そしてシグナムの姿は消えて行き、仮面を付けた謎の男がスウエンの体内へと手を伸ばしなにかを取る

「お前のリンカーコアは戴く…」

「ぐああああああああ」

「スウエン君!？」

助けに行こうとすると、なのはもバインドで捕縛されBJが解除される

「貴様のリンカーコアも戴く…」

「えっ、力が入らない…」

なのはの体内からも腕が伸びなにかを掴んでいた

「なっ、てめら何者だ、シグナムはどうした!!」

「守護騎士、貴様には興味は無いここで死ね!!」

「訳の分かんねえこと言ってんじゃねえ!!」

ヴィータはカー杯に敵を殴るが、当たった感覚が無くヴィータの体内からも何かが取り出される

「収集、完了」

「くそっ、力が入らねえ」

「あなたは一体？」

倒れる3人を無視し、仮面の男は飛び立っていた

第4話戸惑い（後書き）

突然現れた仮面の男そして倒れるなのは達

次回第5話協力体制

仮面の男の目的それは闇の書の復活そして、はやてを救う為ヴィー
タ達は管理局に協力する

第5話協力体制（前書き）

ここからはオリジナルストーリーです
仮面の男の野望を阻止する為、そして愛する主を救う為、ヴィータ
達は管理局に協力する

第5話協力体制

あれから2日後、時空管理局

「うつ、ここは…」

目を覚ますと、横にはなのはそしてヴィータが寝ていた

「おはよう、スウエン」

「えっ、フェイト？」

「元気そうで良かったそれとスウエン、シグナムと言う人があなたに話があるって」

「えっ、シグナムさんが？」

場所を聞いて、スウエンが来ると、真剣な顔をしたシグナムがいた
「シグナムさん…」

「スウエン、主がさらわれた」

「えっ、どう言う事ですか？」

今までの事を話すと、スウエンは驚きを隠せない表情で、シグナムを見ていた

「そして私達は、奴らの目的を聞いた。奴らは主の力を使い闇の書を復活させるつもりだ」

「そして復活した闇の書ははやてちゃんを喰らい、殺す」

「えっ、それってつまり…」

「そう、主は奴らに殺される。だが我々はそんなことさせる訳にはいかない…」

かなり傷だらけなシグナムが言うと、後ろからヴィータが来る

「どう言う事だよ、シグナム!!」

「落ち着いて、ヴィータ」

「ふざけんな、これが落ち着いていられる状況かよ!!」

ヴィータは今にもシグナムに殴りかかろうとしていたが、ある少年に止められる

「止める、今君達が争っても、主は帰ってこないんだ」

「クロノ…」

「久しぶりだな、スウェンそれより本当に協力してくれるのか？」

「我々だけでは、奴らを止める事は出来ないからな」

シグナムが言っているとクロノは少し笑い、手を前に出す

「君達の事はもう調べている、これからよろしくな…」

「どう言う事だ、シグナムまさか管理局なんかに協力すんじゃないやねえよな？」

「ヴィータ、言った筈だ今の我々では主を救出するのは無理だと」

「だがよ…チツ、分かったよ協力すればいいんだろ」

ヴィータもどうにか納得し、仮面の男の目的を止める為に、動き出した

第5話協力体制（後書き）

ようやく和解でき、仮面の男を追うなのは達の前に2人の魔導師が襲いかかる

次回第6話マテリアル

闇の書より生まれた戦士？

第6話マテリアル（前書き）

突如、現れた魔導師それはなのはとフエイト？だった

第6話マテリアル

とある次元世界ヴィータは、管理局に協力するのが嫌で一人で仮面の男の行方を追っていた

「チツ、また外れかよ…」

目の前には既にリンカーコアを取られ倒れた魔導師がいた

「まあ、ここ通った事は確かか、行くぞアイゼン」

デバイスを構えなおし、ヴィータは仮面の男の痕跡を探すが、見つからずお腹も減ってきた

「畜生…はやてのご飯が食べてえよ」

お腹は鳴るばかりで、だんだんと力も抜けて行く

「ようやく見つけた、ヴィータ」

「何だよ、スウェン私を連れ戻しに来たのか？」

「違うよ、お腹が空いているだろうと思ってさおにぎり持ってきたんだ」

包みをスウェンがヴィータに渡すと、ヴィータは少し照れて「ありがとうな」と言いおにぎりを食べて行く

「それで、手掛かりは見つかったの？」

「全然だよ、それよりそっちは？」

「こっちも行き詰っているよでもまだ諦めた訳じゃないから」

「そうか…なあ、スウェン一つだけ聞きてえんだ」

スウェンが耳を傾けると、ヴィータは話す

「お前はなんで高町なんとかじゃなくて、私達に味方したんだ？」

「僕は、何でだろうねでも放っておけなかったんだ。君達を」

「どう言う事だよ？」

「別に深い意味は無いよ。ただ守りたかったそれだけかな？」

スウェンが言くと、ヴィータは何も言わず立ち上がり空を見るすると、二人の魔導師が宙に浮いていた

「あなたが聖剣士もしくはZEROですか？」

「君達は何者？」

「すいません、自己紹介が遅れました。私は星光の殉滅者^{シュテル・ザ・デストラクター}あなた方のお仲間である高町なのはのデータを元に造られた闇の書の構築体^{マテリアル}です」

丁寧に説明すると、もう一人の魔導師も自己紹介をする

「僕は雷刃の襲撃者お前達の仲間であるフェイト・テストロッサのデータ^{レヴィ・ザ・スラッシャー}を元に造られた構築体^{マテリアル}だ！！」

「何だか知らねえが、敵ってことでいいんだよね？」

「別に構いませんよ、あなたの排除命令は出てますし……」

「おい星光、向こうはどうする気だ？」

「あつちはあなたに任せますよ。ただし、下手に騒ぎを広げないでください」

雷刃は頷き、スウエンの前に来る

「行くぞ、我が剣に一片の迷い無〜〜し！！」

「どうしてもやるんだね、なら行くよ」

「行きますよ、鉄槌の騎士ヴィータ！！」

「返り討ちにしてやる。行くぞ、アイゼン！！」

4人の戦いが始まった

第6話マテリアル（後書き）

戦闘を繰り広げるスウェンとヴィータそしてスウェンは激戦の最中、
はやての苦しみを感じる

次回第7話覚醒？

感じる痛みそして聞こえてくる声？

第7話覚醒？（前書き）

聞こえてくる声そして広がって行く闇？

第7話覚醒？

「中々やりますね、鉄槌の騎士ヴィータ」

「はやての居場所を吐いてもらうまで、倒れる訳にはいかねえからな」

「僕のスピードについてくるとは、中々やるな」

「どいてくれないかな、今君達に構っている時間は無いんだ」

4人は、お互いに一步も引かない互角な戦いを繰り広げて行く

「ですが、私達の勝ちです。ZERO」

「なっ、どう言う事!？」

「お前達は闇に喰われる。そして僕らの枷となるんだ」

徐々に体の自由が奪われていき、体の一部が消えて行く

「グッ、幻覚か？」

「違いますよ、あなたをいや、あなた達を歓迎しているのですよ闇が…」

「どう言う事だ、お前!！」

「元々、闇の人間が闇に好かれる事は当然ですなえ、ZERO」

星光の言葉にヴィータがスウェンを見ると、既にスウェンの体の半分は闇と同化していた

「闇は彼をいやZEROを取り込むですよ」

「ふざけんな、これ以上…奪われてたまるかよ!！」

無理に腕を動かし、アイゼンを星光にぶつけるが、星光は片手で防ぎアイゼンを握りつぶす

「わかりましたか、鉄槌の騎士…所詮あなたは守護騎士なのですよ」

「畜生…どうすればいいんだ…」

ヴィータが考えている最中にもスウェンは闇と同化して行っていた。

その頃次元航行艦アースラ内

(この感じ、スウェン君!！)

「どうしたの、なのは？」

「スウェン君が、助けてって…」

「どう言う事だ、テストロッサ？」

シグナムが聞くと、フェイトは事情を説明し、なのはの後にについて行く。その頃、とある次元世界内ヴィータは星光に為す術もなく、敗北していた

「つまらないですね、これがあなたの力ですか？」

「クッ、放しやがれ!!」

「流石は、鉄槌の騎士ヴィータ。私達のマスターが信頼するだけはありませんね」

「どう言う事だ…お前ら一体、何を知っている!!」

ヴィータが聞くと、バインドに拘束され、雷刃が来る

「どうする、殺すのか？」

「あなたに任せますよ、雷刃。どうやら邪魔者が来たようですから…」

「ヴィータちゃん、スウェン君!!」

「あなたが私のオリジナルですか、初めまして私は星光の殉滅者と言います」

丁寧に挨拶をすると、なのはは頭を下げる

「中々、礼儀正しい人間のようにですね…」

「君は、私達の敵なの？」

「そうですね、私はあなたの敵です」

「なら、私だって、退けない!!」

なのははレイジングハートを構え、星光と戦う。そしてフェイトは雷刃の前に来ていた

「お前が僕のオリジナルか？」

「私はフェイト…君は一体？」

「僕は雷刃の襲撃者、お前を倒す!!」

「スウェンを私の仲間を傷つけるなら、容赦はしない。行くよ、バルディッシュ!!」

フェイトと雷刃の戦いも始まった

第7話覚醒？（後書き）

最初は互角の戦いを繰り広げていた二人だったが、徐々に追い詰められていく

次回第8話孤独の心

圧倒的な力の差、そして目覚める真の心？

第8話孤独の心（前書き）

過去の記憶そして目覚める心？

第8話孤独の心

フェイトと雷刃の戦い序盤はどちらも互角だったが、後半からフェイトに疲れが見え、雷刃が押し始める

「どうした、どうした、どうしたああああ」

「グッ、防ぎきれない」

向こうは疲れを感じないのかフェイトは、反撃をする暇もなく次々と攻撃を喰らっていく

「デイベイン…バスター!!」

「甘いですね、防御」

なのはのデイベインバスターは星光に届かず、片腕でガードされる
「ならば次はこちらですね…行きます!!」

「!?!」

突然、なのはの体の自由が奪われ星光は何重もの魔法陣を展開して行く

「ルシフェリオン・ブレイカー!!!!」

「きゃああああああ」

直撃を受け、なのはは落ちて行く。そして向こうも決着がつき、立っていたのは雷刃だった

「我々の勝ちですね、高町なのは」

「……………」

だが星光の一撃を受けたなのはは何も喋れず、倒れていた。そしてその頃、スウェンは闇に飲まれながらある夢を見る。それはもう記憶にすらない場所だった

「ようやく来ましたか、聖剣士いや今はスウェンでしたね」

「えっ、あなたは…」

「私は闇の書の意味、あなたは今こそ知らなければなりません」

「どう言う事ですか!?!」

スウェンが聞くと、頭の中に色々な映像が映し出される。そしてそ

の中では様々な人々が苦しみ死んでいた

「それが、あなたの全てですよ。スウエン」

「君は本当に闇の書の意味なの？」

「そうですね、そしてスウエンあなたが守りたい者に託しなさい」

そう言つて渡された物それは、デバイスのパーツだった

「これって、カードリッジシステムですか？」

「そうです、これをあの子たちに…私は行かねばなりません…主を…救う為に…」

「えっ、どう言う事ですか？」

スウエンが聞くが、返事は無く消えて行き、スウエンは目覚めた

「ここは一体…？」

記憶が混乱しており今までの状況を思い出すと、目の前に突然フェイトの魔法が飛んでくる

（そうだ、思い出した…僕は、あの子と）

思い出せたのはいいが、向こうは完璧にスウエンをターゲットにして攻撃を仕掛けてくる。何とか隙を狙つてエグゼキューターを取り出すが、うまく起動できず雷刃の攻撃によりエグゼキューターが手から弾かれる

「さあ、お前の負けだ行くぞ！！」

「どうする…僕はまだ死ぬわけには！？」

真っ直ぐに、向かつてくる雷刃そしてスウエンを斬ろうとすると、ガキーンという音が響き目の前にデバイスが現れた

第8話孤独の心（後書き）

突如、スウエンの前に現れたデバイスそれは…

次回第9話聖剣士の証

記憶の中に微かに残る名それは…クライス

第9話聖剣士の証（前書き）

それは…希望

第9話聖剣士の証

雷刃とスウエンの間に現れたデバイス、そしてスウエンの頭に声が響く

「聞こえますか、スウエン」

「あなたは誰？」

「私はノルン…あなたの力、クライス・ソウルを託します」

「クライス…ソウル？」

スウエンは驚きながら、手で握ると、七色の光がスウエンを包み、光が広がって行く

「この感じ…懐かしい」

光がスウエンを包んでいくと、今までスウエンの自由を奪っていた闇が消えて行き腕には剣が持たれる

「行くよ、クライス・ソウル!!」

『ターゲット補足…シューティングデイバスター行けます』

雷刃をターゲットに設定し、スウエンはクライスをシュートモードに変更する

「あんな武装…聞いてないぞ!？」

「行くよ…シュート!!」

トリガーを引くと、大出力の魔力砲が、雷刃を包み雷刃は地上にたたき落とされる

『敵性反応、健在…ブレイズモードに移行します』

プシューという音と共に、先ほどの剣に戻り、スウエンは星光を見る

「やりますね、流石はZERO…」

「星光…君もやる気？」

「マスターの願いを叶えるのなら戦いますでももう私には時間がありませんから」

突然、星光と雷刃の姿が消えて行く。そしてスウエンはなにか強大な魔力を感じ取る

（この魔力…はやてなのか？）

だが今感じる魔力それは、なのはやフェイトそれに自分とは比べ物にならない量だった

『マスター、ここは一度退く事を勧めます』

「わかっているよ、クライス。でも…」

今、感じている魔力がはやての物なら、危険だという事は今のスウエンにも分かった

『マスター、聞こえていますか？』

「確かにクライスの言うとおりだね、今の状況じゃ勝てる見込みは0だ」

スウエンはクライスの言葉通り、ヴィータ、なのは、フェイトを連れてアースラへと戻った

第9話聖剣士の証（後書き）

遂に真の覚醒を果たした闇の書そしてそれに取り込まれ守護騎士は…
次回第10話闇に消える者たち

消えて行く守護騎士そして管理局はある決断をアースラに言い渡す

第10話闇に消える者たち（前書き）

真に覚醒した闇の書そして管理局はある決断を言い渡す

第10話闇に消える者たち

あれから半日スウエンはユーノやクロノに事情を説明し、なのはとフェイトのデバイスを借りて、闇の書の意味より授かった。カードリッジシステムを入れてもらう

「本当にいいの、スウエン君。勝手にいれちゃって」

「はい、お願いします」

「でも許可取った方がいいと思うけど…」

「大丈夫です、もう取ってますから」

スウエンが言いきると、エイミイはスウエンを少しだけ見た後、制作に取り掛かる

「そう言えば、君のデバイスはもう付いているの？」

「いえまだですけど、僕じゃ扱えませんか」

「それもそうかもね」じゃあこの作業はエイミイお姉さんにお任せあれ」

「お願いします…」

スウエンはエイミイにお願いをして部屋へと戻って行く

「お帰り、スウエン」

「ヴィータ、どうしてここに？」

「スウエン、はやての生命力が低下しているって本当か!!」

スウエンはヴィータの言葉に本当の事が言えず、ベッドの上に転がる

「なあ、どうなんだよ。スウエン」

「僕に聞かれても困るよ…それよりシグナムさん達は？」

「考えたい事があるって、外にいるよ」

「じゃあ僕も少しシグナムさんに聞きたい事があるし、外に出ようかな？」

スウエンが外に出ると、寒い風がスウエンに当たる。そしてシグナムは星空を眺めていた

「シグナムさん」

「どうした、スウエン？」

「何か考え事ですか？」

「まあな、主がどうしているのかと思つてな……」

空を見て、シグナムが言うのと突然シグナムは苦しみだし、スウエンはある人物の気配を感じる

「久しぶりだな、ZERO」

「あなたは仮面の男」

「僕の名前はナイトだ。でも今、君には用は無い」

そう言つと、シグナムへと手を伸ばし触れられた箇所が消えて行く

「ようやく始まりだ……全世界を闇に包む我らの計画が……」

シグナムが完全に消えると、今まで感じていたはやての心に変化が現れもう一つの人格が姿を現す。そして管理局はある命令を発令した
「現時刻を持つて、闇の書並びにその関係者を、次元犯罪者として扱う」

「待つてください、あの子は八神はやては、たまたま闇の書を手に入れただけです」

「だが、放っておけば、君のお父さん見なくなる……いいたい事は分かるなクロノ執務官」

「了解……」

納得できないまま、アースラははやてを止める為に海鳴へと向かった

第10話闇に消える者たち（後書き）

全ては闇の書を止める為…

次回第11話闇を統べる者

はやてから生まれた人格それは、優しいはやてとは正反対だった

第11話闇を統べる者（前書き）

全ての頂点に君臨する者それははやてでは無かった

第11話闇を統べる者

同時刻、海鳴市

「クククハハハハ…ようやく我は出られた」

そこにいた者、それは姿こそはやてそっくりだったが、性格は全然違く纏っているオーラも違った

「どうした、エイミイ？」

「電波障害で、海鳴の様子が映し出せない」

「なら直接行って確かめるしかないか、エイミイ預けていたデバイス渡してくれるか？」

「はい、デュランダル…気を付けてね、クロノ君」

クロノはエイミイから受け取りただ一人で向かっていく

「ずいぶん酷いな…これも闇の書の影響なのか？」

まるで嵐のように、風は吹き、雨も降っていた。さらに、雷も落ちており人々は不安の色を隠せなかった

「無理もないか…普通の人には信じられない現象だものな…」

デュランダルを起動して空へ上がると突然、魔力砲が飛んでくる。何とかぎりぎりで避けてクロノはデュランダルを構える

「お前が、この事件の犯人か？」

「事件の犯人、何の事だ？」

「とぼけるな、お前がこの自然現象を起こしているのだろう」

「成程、お前が奴等の言っていた管理局か…」

向こうの魔導師は少し不気味な笑みを浮かべて、クロノにデバイスを向ける

「一撃で消してやろう…アロンドイト!!」

魔導師は魔法を唱えるが、クロノはものともせず設置型のバインドを置いて行く

「どうした、逃げてばかりでは戦いにならぬぞ？」

クロノは少しずつ、自分の設置したバインドに誘い込もうとするが、

向こうも警戒してその場から魔法を唱えていた

「流石に、僕だけじゃ無理か……せめてフェイトかなのはがいれば……」
だが今の二人は、この前のマテリアルとの戦いで怪我をしている為、
助けに来る事は期待できなかった

「我らが王あなたの騎士ナイト只今参上しました」

「別に貴様の助けなど要らぬ……それよりもう一人はどうした？」

「夜風なら、もうすぐ来ますよ」

ナイトが話すと、既に息絶えた夜風を持つて、スウェンが来た。だがスウェンから感じるものそれは憎しみや怒りだけで、クロノの知るスウェンでは無かった

「お前達は許さない……はやてを、守護騎士を返せえええええ！」

「!？」

突然、殴られたナイトの仮面は外れ、その顔にクロノは驚愕する。それは自分に魔法を覚えてくれた人物の姿だったからだ

「何故、あなたが闇の書を？」

「私達には必要だった、願いをかなえる為に……」

「だがそれが危険だという事は、あなただって知っていた筈だ」

「でも私達のマスターの為に、どうしても必要だった!？」

クロノの師匠であるアリアが話していると、突然後ろから魔力刃を刺され消えて行く

「所詮は、小物か……」

闇の書へと吸収されはやての姿をした魔導師は再び笑みを見せる

「どうした、かかってこないのか？」

「クツ」

挑みたい気持ちはあったが、向こうの魔力と自分の魔力では圧倒的な差がありクロノは自分の力の無さを悔やんでいた。だが暴走しているスウェンは力の限りに、魔導師に攻撃を加えて行くが、魔導師は顔色一つ変えずにスウェンの攻撃を受け流していた

「お前も邪魔だ……エクスカリバー!!!」

「!？」

突然目の前で唱えられた魔法によりスウェンは、闇の書へと吸収される。そしてクロノは一度体制を立て直す為にアースラへと帰還した

第11話闇を統べる者（後書き）

守護騎士、アリアそしてスウェン多くの者が消えて行く中でなのはとフェイトは彼が託した力で戦う

次回第12話闇VS星光&雷刃

苦戦するフェイトとなのはの前に現れた者それはマテリアルだった

第12話闇VS星光&雷刃（前書き）

苦戦するのは&フェイトそして現れたのはマテリアルだった？
（マテリアルの言葉遣いを変更しています）

第12話 闇VS星光&雷刃

あれから数時間後、アースラ

「もう平気だ、エイミィ」

傷の手当てをして、ようやく回復した映像回線で現在の海鳴の状況を見ていた

「クロノ君、どうする気？」

「どうするもこうするも無いだろう…僕達が出るのは、彼女を救う事だけだからな」

だが当のクロノの腕は震え、とてもじゃないが、戦える状態ではなかった。そしてエイミィはこんなに恐怖を感じているクロノを見た事が無く、少し戸惑っていた

「そう言えば、レイジングハートとバルディッシュの調子は？」

「一応、スウェン君から言われたシステムはインプットしてあるよ。でも所有者の二人がああ状態じゃ…」

まだ二人は目を覚まさず、クロノはエイミィに話した後、レイジングハートとバルディッシュを受け取り、なのはとフェイトのいる部屋へと行く。だが二人は目覚める気配も無く、ユーノとアルフは二人を心配そうに見ていた

「二人の様子は？」

「もう回復してもいい筈だけど、全然目を覚まさないんだ」

「ちょっと、退いてくれるか？」

クロノは手に持っているレイジングハートをなのはの横に置き、もう片方のバルディッシュをフェイトの横に置いた

「どう言うつもりだい、クロノの奴？」

「わからないけど、多分デバイスを使って目覚めさせようとしているんじゃないかな？」

二人が話し合っていると、クロノはレイジングハートとバルディッシュを起動させる。すると、二人は目を覚ましあたりを見渡した

「ようやく目覚めたか、二人とも」

「あれ、ここはアースラ内…でもなんでここに？」

今までの事を思い出し、クロノの説明を受けブリッジへと来る

「あれが現在の海鳴の状況だ…」

画面に映し出された映像それは、なのはやフェイトにとっては信じられない映像だった

「どう言う事、クロノ？」

「現在、海鳴では闇の書の影響で自然災害が起きている。そしてスウェンや守護騎士は闇の書に吸収された」

クロノが話すと、二人は飛び出していく。だがクロノは止めずに、デュランダルにあるデータを入れ込む

「クロノ君、それは…」

「僕があの人から受け取った対闇の書用の最終兵器【魔導砲】だ」
「でもそれは…」

「僕だって使いたくはない。だが万が一の場合に備えて僕はこのデータを持っていく」

クロノはデータの移し替えが終了し、再び海鳴へと向かう。その頃フェイトとなのはは戦うが、自分達の攻撃が全く効かずに、フェイトまでもが吸収されてしまう

「ハアハア、どうすれば…」

既に出来るだけの事は全てやったが、それでも向こうには、かすり傷一つ付かずなのはターゲットにしていた

「消え失せろ、我が前からオベリスクー！」

強大な魔力砲がなのはを襲うが、突如横から飛んできた魔力砲により打ち消される

「大丈夫ですか、高町なのは？」

「君は星光ちゃんだよ…」

「そうです、そして今は闇を統べる王を止めなければ…」

「我を止めるだと、ふざけた事を…今の貴様ごときに我が止められるものか!？」

闇が話していると、突然肩を斬られ出血する

「お前は、僕と星光が止めるんだぞ」

「たかが二人の構築体ごときが、我を倒せるものか」

「ですが、我々にも退けぬ理由があります」

「そうだぞ、約束したんだ。絶対にこいつを守るって!!」

二人は戦闘態勢に入る。そして闇は笑いながら二人を睨む

「後悔しても知らぬぞ…星光そして雷刃」

「僕らの命に代えてもお前は倒す…」

「それが我らがマスターの願いですから」

「ならば来い、貴様らも闇の生贄としてくれるわ!!」

3人の激闘が始まる

第12話闇VS星光&雷刃（後書き）

星光と雷刃そして闇3人の戦いは激しさを増していくそして闇の書に取り込まれたスウエンとフェイトはそこで再開する

次回第13話託された想い、託された力

アリシアそれは二人にとっての始まりだった

第13話託された想い、託された力（前書き）

二人の始まりそれはアリシア？

第13話託された想い、託された力

マテリアルが激闘を繰り広げている頃、闇の書に取り込まれたスウエンとフェイトはある場所にいた

「ここは…フェイト？」

「スウエン、無事だったんだね」

「ちよつと苦しいよ、フェイト」

「ごめん、本当に嬉しくって…」

少し反省をして二人があたりを見渡すと、一人の女の子が来る。そしてそれが誰なのかはすぐに分かった

「こんな所にいたんだ、二人とも」

（えっ…アリシア？）

二人は今、目の前にいる少女を見て不思議に思っていると、アリシアはフェイトとスウエンの手を持ってある場所に連れてくる

「連れてきたよ、お母さん」

「まったく、どこに行っていたの？」

「まあまあ、プレシア二人とも戻ってきたんですし、いいじゃないですか」

「それもそうね、じゃあ朝ごはんを食べましょうか」

みんな席に着き、ご飯を食べた後、スウエンは一人で魔法の勉強を始める

「いつも熱心ですね、スウエンは」

「リニス、僕に何か用？」

「別に用はありませんよ、ただそんなに勉強だけやるのではなく遊んだらどうですか？」

「これだけ終わったら、休憩するよ」

スウエンが言うとりニスは笑顔で部屋を出て行く

（これは夢なのか…それとも…）

記憶があいまいで、スウエンは一応、息抜きの為にリビングに来る。

すると、フェイトとアリシアが料理を作っていた

「フェイト、それは砂糖じゃなくって塩だよ」

「えっ……？」

アリシアが止めるが、フェイトは塩を入れてしまいもう一度作りなおしていた

「大丈夫、僕も手伝おうか？」

スウェンが聞くと、二人は平気だよと言ってスウェンは外に出てアルフと遊ぶ

「どうかしたのかい、スウェン？」

「あつ、別に何でもないよ。それよりアルフ、フェイトとアリシアなに作っているの？」

「私は知らないよ、リニスに聞けばいいじゃないか」

アルフが言うと、二人はスウェンに今、作ったケーキを渡す

「スウェン、これ食べてくれる？」

「えっ、僕に？」

二人は頷き、スウェンは手を洗った後、二人がくれたケーキを食べる。そして食べて行く内に涙が零れ始めアリシアは悲しそうにスウェンとフェイトを見る

「本当は、スウェンともっと遊びたかった。フェイトといろいろ作りたかった」

「アリシア……」

「でも君達のいる世界は違うんだよね、そして待っている人がいるんですよ」

「うん、だから行かなくちゃ……」

二人が決心すると、アリシアはフェイトにバルディッシュを託す

「スウェン、また会える？」

「わからないよ、でも僕もまた君と会いたいな……」

「じゃあさよならは言わない……行ってらっしゃいスウェン、フェイト」

「うん、行ってきます」

二人が挨拶すると、アリシアは消え元の空間に戻る

「スウェン、行くよ…」

「うん、僕も始めなきゃいつまでも過去を引きずっていたって前には進めないんだから」

二人は自分たちに来る最大魔法を唱え、闇の書が作り出した隔離空間より離脱した

第13話託された想い、託された力（後書き）

過去との別れそして新たな思いを胸に戦う

次回第14話暴走

闇を倒したなのは達そして、主を失った闇の書は暴走する

第14話暴走（前書き）

主を失った闇の書…そして暴走

第14話暴走

「ハアハア、やったぞ…」

「あなたの負けです…闇」

スウエンとフェイトが脱出すると、傷だらけの雷刃、星光が闇を倒していた

「我が消えようとも、闇は消えないククハハハハ」

闇の人格は消え力を失ったように落ちて行くはやてを何者かが優しく包む

「あなたは、闇の書の意味？」

「久しぶりですね、ZEROそしてよく頑張りましたね星光、雷刃」

「ちよつと疲れました…私は休みます」

「僕も疲れたぞ、じゃあな」

二人は光となり消えて行き、今まで海鳴を覆っていた暗雲は消え、太陽が顔を出していた

「終わったのかな？」

だが何故か、まだ胸騒ぎが止まらず危険な魔力は残っていた

「あの子の最後の言葉、ちよつと引つかかるね」

「闇は消えないって言葉の事？」

「うん、だからまだ終わりじゃないと思うよ」

「みんな、上に上がって!!」

スウエンの言葉に上空に上がると、今までよりも遥かにでかい闇があたりを包み込み、一瞬にして夜になる

「遅かったか…」

「クロノ、何か知っているの？」

「今さつきエイミィから連絡がきた。この海鳴を中心に闇が広がっているって」

話していると、海鳴の海上に闇の集合体が現れ、なのは達に魔力砲を撃ち込んでくる

「あれは一体、何なの？」

「多分、制御不能に陥った闇の書が暴走したんだと思う」

スウェンが話していると、第2射が海鳴市に迫るが、ギリギリでユーノとアルフの魔法により止められる

「どうする気だい、クロノ…」

「奴が全ての次元世界を闇で取り込む前に、消さなければならない」
「そのリミットは…」

「多分30分ぐらいだろうな…」

30分、その30分が全ての次元世界の命運を分ける

第14話暴走（後書き）

暴走する闇の書そしてクロノはある決断をする
次回第15話夜天の主

アルカンシエル…それが残された唯一の手

第15話 夜天の主（前書き）

アルカンシエル…それが最後の手

第15話 夜天の主

「目覚めてください…我が主」

（誰や、シグナムか？）

声が聞こえ目を覚ますと目の前にはある女性がいた

「君が私を呼んだんか？」

「私は闇の書の意味ですがもう私では止められません」

「これって、スウェン君？」

画面に映った人物それは姿こそ違ったが、自分の知るスウェンだった
「彼らは自分の命をかけて暴走している私を止めようとしています」

「みんなが、命をかけている…」

画面では傷つきながらも、戦うスウェンやなのはの姿が見えた

「なあ、君…私にも戦う力があるんか？」

闇の書の意味は頷く。そしてはやては、決心する

「君のその力、私に貸してくれへんか？」

「ですが…」

「みんなは私を救う為に、命かけてくれたんや、そして今も君の為に戦っている。迷惑ばかりかけたらあかんやろ」

はやての言葉に納得したのか闇の書の意味はある一冊の本をはやてに託す

「君はもう闇の書の意味何かじゃあらへん…私が名前付けたるわ、

祝福の風…リインフォースそして夜天の書や！！」

「祝福の風…リインフォース」

「さあ、行くでみんなを助けに」

「はい、我が主」

リインフォースが頷くと、はやてと周りに光が集まり守護騎士が復活する。そしてはやて自身も魔導師として覚醒し、スウェン達の元に来る

「ごめんな、みんな私のせいで迷惑かけて」

「はやて、無事だったんだ…」

「シャル、みんなの魔力回復させるんや!!」

「了解、はやてちゃん行くわよ、クラールヴィント」

シャルが魔法を唱えると、なのは達の傷が治り魔力も回復する

「作戦はわかつとるで、あの子を宇宙にあげればいいんやろ」

「ああ、その為には奴が回復出来ないダメージを与える必要がある」

「ならあたしの出番だな、行くぞ。うおりゃああああ!!」

ヴィータの一撃で怯んでいる所にすかさずシグナムがもう一撃入れる

「駆ける、隼!!」

『シュツルムファルケン!!』

「なら次は僕だねクライス!!」

『デイス・バスター!!』

向こうの修復スピードより早くこっちの攻撃が効きクロノがエター

ナルコフィンで足止めをする

「準備はいい、二人とも」

「私は平気だよ」

「こっちも準備完了や」

3人は一斉に構え、魔法陣を展開して行く

「響け、終焉の笛ラグナロク!!」

「スターライト…」

「ライトニング」

「ブレイカー!!」

3人の魔法が当たりスウェンとクロノが最後に放つ

「行くぞ、シューティングディバスター」

「魔導砲発射ああああ!!」

二人の攻撃も当たり核はアルフ、ユーノ、シャルの力により宇宙へと上がった

「今よ、アルカンシエル発射ああああ!!」

アルカンシエルが直撃し、ようやく闇の書事件は終わりを迎えた

第15話 夜天の主（後書き）

長かった戦いも終わり、海鳴に春が来る頃、
なのはやクロノ達はお花見に来ていた

次回最終話桜の季節…それは別れなの？

春、それは旅立ちの季節

最終話 桜の季節、それは別れなの？（前書き）

新たな思いを胸に、少女、少年たちは旅立っていく

最終話 桜の季節、それは別れなの？

闇の書事件も終わり、海鳴には春が来ていた

「ほら、早く、早く!!」

「そんなに引つ張らないでよ、なのは…」

スウエンはなのはに引つ張られ、高町家を出てお花見会場へと向かう。到着すると、既にお花見は始まっておりアースラの人や守護騎士もいた

「ようやく到着か、二人とも」

「ごめんなさい、遅れてしまって…」

「別に怒ってないさ、それよりもスウエンあの話考えてくれたか？」
クロノが聞くと、スウエンは黙りこむ。なのはは何の事か分からず首を傾げる

「別にすぐに返事が欲しい訳じゃない…だが少しは考えておいてくれ」

「うん、分かっているよ…」

スウエンが頷くと、クロノは笑って自分の席へと戻って行く

「ねえ、何の話？」

「えっ、なのはには関係の無い事だよ。それよりも早く皆の所に行こう」

スウエンはなのはに話さず、フェイトやアルフそれにヴィータはやてのいる場所へと来る

「久しぶりやな〜スウエン君」

「うん、久しぶりって確か3日前に会ったよね」

スウエンが言うとはやては黙りこみ、フェイトが話しかけてくる
「そう言えば、スウエンが預けたデバイス返すね」

「えっ、もう修理が完了したの？」

スウエンが驚きながら受け取ると、どこにも異常は無く正常に動いていた

「ありがとうね、フェイト」

スウエンはクライスをしまいフェイトにお礼を言った後、ユーノの元に向かう

「やあ、スウエンどうかしたの？」

「ユーノ、例の件だけど捜査は？」

「一応、今も続いているけど、確かな情報が出て来てない」

「二人とも、何の話？」

急になのはが入って来て、二人はあわてて会話を止める

「じゃあ、よろしくね。ユーノ」

スウエンはすぐさまその場から去り、なのはは何故か仲間外れ感を感じる

（スウエン君、私に隠し事でもあるのかな？）

一応、考えながらなのはが席に戻るとスウエンも戻っておりお茶を飲んでいた

「どうかしたん、スウエン君？」

「別に何でもないよ、それよりはやてもう体は自由に動くの？」

「もう闇の書の影響もないし平気や」

「なら、いいんだけど…」

スウエンはお茶を飲んだ後、考え事をする為に一人で桜を見る。そしてなのははそんなスウエンを影から見ていた

「もう出てきていいよ、なのは」

「わかってたんだ…」

「僕に何か用？」

「スウエン君、ミッドチルダに行くんだよね…」

なのはの言葉にスウエンは驚きながらなのはを見る

「どこで聞いたの？」

「誰からも聞いてないよ、ただ君が私を避けていたから…」

「ごめんね、本当は相談するつもりだった」

スウエンが訳を話すと、なのはも納得する

「それで君に持っていてほしいんだ、僕のデバイスを…」

「えっでも、それじゃ…」

「僕にはエグゼキューターがあるから平気だよ、それに過去よりも未来に生きたいから…」

「…分かったよ、クライスは大事に持ってる。だから…」

なのはは今にも泣き出しそうな顔になりスウエンはそののを抱きしめる

「じゃあね、また会う時まで…」

「うん、スウエン君元気でね!!」

そして月日が経ち、なのは達は中学3年生になっていた

「行ってきます」

「気を付けるのよ、なのは」

「わかってるよ」

玄関を閉めて、いつもと同じ通学路を走って行く

「なのは…」

後ろから声が聞こえ、振り向くとフェイトが来た

「おはよう、フェイトちゃん」

「今日から3年生なんだよね、緊張する」

「にはははは、別に緊張することなんてないよフェイトちゃん」

フェイトとなのはが話していると、後ろから気配を感じとつさになのはは避ける

「チッ、外したか…」

「はやてちゃん、いい加減にセクハラは止めた方がいいよ？」

「フェイトちゃんは簡単なんやけどな…」

「そう言いながら、触るのは止めてくれるはやて？」

フェイトとなのはに怒られ、はやてはしょんぼりしながら学校へと着く

「遅…………い!!」

「アリサちゃん、別に遅刻してる訳じゃないし…」

「今日から最高学年よ、あんた達意識が足りないんじゃない？」

「ごめんね、今度からは気を付けるよ」

なのは軽く謝り、教室に向かい、席に着く

「これから、こんな日々が続けばいいな…」

「どうしたの、なのは？」

「えっ、何でもないよ」

「なら早く並びなさいよ、今日は体育館で始業式でしょ!!」

アリサに怒られ、なのはは渋々、列に並び体育館へと向かった

最終話 桜の季節、それは別れなの？（後書き）

これで一応、魔導新世紀リリカルなのはA'sは終了です
次回からは魔導新世紀リリカルなのはStrikersが始まりま
す

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6104q/>

魔導新世紀リリカルなのはA's

2011年4月8日16時39分発行